

Gikyohan Times

No.0003

岐阜県教販通信

2020年8月発行

岐阜県の学校現場の皆さんと考える 「コロナ後」の教育

当社は岐阜県の全小中高校に紙の教科書を供給し続けて100年以上の会社です。今後紙の教科書、教材、指導書がデジタルに変遷していく、教育のITC化、オンライン化していく中、当社として教科書に関する様々な情報を「岐阜県教販通信」として提供していきます。今回のテーマは「コロナ後」の教育の第二弾として引き続き寺脇研氏に提案して頂きました。是非ご一読くださりコロナ後の教育に役立てればと思います。今後とも岐阜県教販通信をよろしく願います。

通信のバックナンバー→ <http://www.gifukenyohan.co.jp>



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省NO.1の論客でなし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

長かった休業期間を経て再開された学校は、夏休みに入っても、なお慌ただしいことだろう。学習内容の補充のために夏休み期間を短縮したり、宿題を工夫したり、例年とは違った対応に追われたところが多かったのではなかろうか。感染拡大でコロナへの心配が募る中、教職員の皆さんのご苦勞が忍ばれる。子どもたちも大変だ。再開されても分散登校の時期が続いたり、暑さの中マスク着用とか校内での「三密」防止行動とかの制約があったりで、なかなか学校生活のリズムを取り戻せないのではないだろうか。子どもの一番近くにいる教職員には、その辛さが痛いほどわかっているに違いない。そんな中で、学習の遅れを取り戻すべく授業時間の確保に努めなければならぬのだから、教職員、児童・生徒ともによく頑張っていると思う。たしかに、休業で失われた授業を補充していくことは大切だ。保護者や社会の要請も、それが第一になるだろう。当の子どもたちにとっても、学習の機会を取り戻していくことは極めて重要である。学びたいという意欲に応じてやってほしい。

ただ、子どもたちが取り戻さなければならないのは、「学び」だけではない。長期の休業という異常事態の間に抱え込んでしまった「心」の問題をどうするか。親もテレワークなどで慣れない仕事の仕方に戸惑うことが多かったろうし、生活の不安を感じて不安定になった面もあるだろう。家庭内での諍いや、子どもに対する虐待事例が増えていたとの見方もある。また、学校に通うという生活リズムを喪失した期間に身体の調子を崩してしまった者もいるかもしれない。

「学び」「心」「身体」の三要素すべてに目配りをしていかなければならないのではないか。「学び」は、時間をかければ、いくらでも取り戻すことができる。しかし、「心」を乱したり「身体」を損なったりすれば、簡単には回復できない。最悪の場合は、ずっと引きずる結果になってしまう。こちらへの対応にも、十分な配慮が求められる。大人であっても、コロナへの過剰な心配や生活変化のせいで心や身体を病むのだから。

「学び」については、学校だけでも対応できる。だが「心」や「身体」のケアは、家庭や地域との連携が欠かせない。PTA や地域社会と情報を共有しながら、必要な協力を要請し、子どもたちを見守っていただけないだろうか。授業時間確保のために中止や縮小になりがちな学校行事についても、家庭、地域と連携する中で、それに代わる効果を持つ活動を発想できたりするかもしれない。

誰もが初めて経験する事態なのだから、これまでにない新しい考え方を取り入れてもいいのではないか。